

日本語における感情喚起の表現をデータ化する

Collecting expressions from Japanese literary works as to how writers evoke emotions within readers

岩垣 守彦
Morihiro Iwagaki

なし
Freelance

Abstract

It may be true that we feel emotional satisfactions only with carefully selected events and their order, but almost all the emotional satisfactions are usually obtained from writers' narrative techniques.

Every writer has their own creative writing techniques, and no two writers employ the same techniques completely or exclusively. One thing, however, is common to all writers: they do not write directly about emotions they are feeling, but indirectly they do so, so that readers can feel the same emotion they felt by their expressions. They describe something imaginatively to arouse emotions and it has been used for a long time as a creative writing skill. Through indirect but descriptive images, writers evoke emotional satisfaction effectively within the reader's mind.

This technique becomes very common and natural as a narrative skill in literary works. So, I am going to classify their imaginative ways of expressions under four categories according to rhetorical effect.

1. はじめに

言葉による伝達は発信者も受信者もそれぞれ脳内の内的資源を使うので、全くその通りに伝わるといったことはないが、言葉は社会性を持つ符牒であるから、コアには「集合イメージ」があって「リンゴ」と言われて「ミカン」をイメージする人はほとんどない。「少年」という文字を見て「老人」を思い浮かべる人も少ない。しかし、「優しさ」「憎さ」「甘え」などの非具象的な心象を伝えることはむずかしい。言葉から即座にイメージを引き出すことができないからである。それで発信者は受信者と共有する符牒を組み合わせ、イメージ化して、受信者の脳を刺激し、受信者が符牒を通して感覚的にイメージを合成するようにしむける。たとえば、小林一茶は「秋の夜；旅の男；男の針仕事」という「(限定化+)名詞」を組み合わせ、(秋の夜や旅の男の針仕事)、「侘びしさ」という心象を受信者が誘い出すように

うに。

非具象的な「心象」(感情)を伝えるには、発信者は、受信者が心象を喚起するように符牒を運用しなければならない、具体的に言うと、名詞・事象(名詞+動詞)を運用して「心象形容詞」(感情)を読者の心に喚起する技巧を使わなければならないのである。

2. 「心象喚起」

「名詞」(単語)には次のような要素が含まれている。

「符牒+集合イメージ+感覚情報(形・色・音・感触・味・香り、その他)+時+場」

したがって、これに「動詞」を加えて「事象(名詞+動詞)」化(たとえば、「だれか風さん見た人いる。だれもいない。だけど、梢の木の葉が震えているところ、いま風さんが通っているんだよ。」(Who has seen the wind?/ Neither I

nor you:/ But when the leaves hang trembling/
The wind is passing thro'.) したり、「限定化+
名詞」(たとえば、「秋の風」のように)して使
っても、また、比喩的に(たとえば、「風の影」
(La Sombra del Viento)のように)使っても心象
を喚起することができる。「名詞」はもちろん、
名詞を動詞が支えて成り立つ「事象」にはすでに
「心象形容詞」(感情)が含まれているのである。
したがって、「名詞・事象の選択」そのものが、
もっとも基本的な「心象喚起の表現技巧」である。
たとえば、アメリカのインディアンは

太陽が天空から降りてきて一人の娘と交わって去
った。娘は男の子を産んだ。

という「民話」を創ったが、この名詞と動詞の選
択の中には

(美しくたくましい)男が(若くて美しい)女を
交わって去った。(若くて美しい)女は(元気な
玉のような)男の子を産んだ。

という心象喚起の要素が含まれている。

3. 「心象喚起」の工夫と型

このことに関しては、すでに[岩垣
2007/07,11,12,2008/03]で述べているが、「心
象」を喚起させる基本型として

0) 「感覚刺激(類似)事象」+ 「心象形容詞」
+ 「(限定化+)名詞(集合イメージ・感覚情
報・時・場)」+ 「(限定化+)(共起)動詞」
心象形容詞(心象名詞) 感情

という組み合わせを考えることができる。この心
象喚起の項目の配列は自由であり、すべての項目
を使う必要はない。たとえば、

彼女はあたりの空気がその輝きに震えるといわ
れるほど美しいノールウエイの山の妖精のようだ
った。(イサク・ディーネセン; 榊田啓介訳・
『バベットの晩餐会』p.13 ちくま文庫(1992))

うめぼしのたねおかれたるみずいろのベンチがあ
れば ずかなる夏(村木道彦) p.082 穂村 弘
『短歌の友人』2007/12/30 河出書房新社)
のように。

受信者に「心象」(感情)を喚起する技巧は昔
から同じである。たとえば、

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖
振る(額田王・万葉集・巻一・23)
春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具
山(持統天皇・万葉集・巻一・28)
東の野にかざろひの立つ見えてかえり見すれば月
かたぶきぬ(柿本人麻呂・万葉集・巻一・48)
我妹子が見し鞆の浦むろの木は常世にあれど見し
人そなき(大伴旅人・万葉集・巻三・446)
春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子
(大伴家持・万葉集・巻十九・4139)
人住まぬ不破の関屋の板庇荒れにしのちはただ秋
の風(新古今集・後京極良経)

いずれも「感覚喚起(類似)事象」+ 「心象形
容詞」+ 「(限定化+)名詞(集合イメージ・感
覚情報・時・場)」+ 「(限定化+)共起動詞」
で感覚を刺激していくつかの「心象」を喚起し、
それを収斂させて一つの「総合心象」が生まれる
ように、事象が選択され配列されている。

上の「基本型」をベースにして、言葉による
「心象喚起」の技巧を考えると、次の四つの型に
分類することができる。

1) 「(限定化+)名詞(集合イメージ・感覚情
報)」+ 「(限定化+)共起動詞」 心象形容詞
(心象名詞) 感情

これは「事象」だけを選択・配列して、「符
牒」に付随して昔から積み重ねられ受け継がれて
来た「集合イメージ・感覚情報・共起動詞」に依
存する技巧から成り立っている。殊に、発信者は
自らの感情を押し付けることなく、過去に一度も
使われたことのない事象列を創って、受け継がれ
て来た「原初的内在心象」(primordial inner

imagery) を「符牒」に託して外在化する。普通、「物語」は、この型を複数使って展開され、同時に複数の「心象」が一つに統合されていく。たとえば、

その一年後くらいだったか、東京駅のコンコースでアユミさんとばったり出会ったことがある。よちよち歩きの可南子ちゃんを連れていた。「これがカナコちゃん？」と僕は聞いた。

「ええ、やっと歩けるようになりました。でも、最近、うちではあんまりカナコって呼ばないんですよ」

「え、どうして？」

「ほら、父親が林太郎で、兄が森介でしょ。だから、林や森に生えるのはキノコだって森介が言い出して、すっかりキノコちゃんになってしまったの」(池澤夏樹『光の指に触れよ』p.12 中央公論新社 2008/1/25)

《蝶来タレリ!》韃靼ノ兵ドヨメキヌ(辻政夫)

気分のどこを見まわしても不安めいたものがないので、そのことが女の足の速度を明るいものにさせた。(川上未映子「あなたたちの恋愛は瀕死」(『乳と卵』p.119 文藝春秋 2008/2/25)

となる。「過去に一度も使われたことなく、二度と使われない比喩」はここに属する。たとえば、西脇順三郎は詩でこう使う。

夏の日

七夕のまつりには
歌麿の虎の木版をかけてみた
今日は浅草へほうずきを買いに出た
帰りには田圃の路を歩いた
にわやなぎの茎に足をとられ
頭髪はすでに簪(しん)にたえず
夏の冠はとれ人間の夢は破れて
永遠のまばたきの中に仏陀を見た
おにゆりの咲く石屋の庭で
しばらく休んだ。

(『第三の神話』)

2) 「感覚喚起(類似)事象」+ 「(限定化+) 名詞(集合イメージ・感覚情報)」+ 「(限定化+) 共起動詞」 心象形容詞(心象名詞) 感情

1) と同様に「符牒」に付随して受け継がれて来た「共有心象」にその効果を託すが、感覚喚起に類似事象(～のような[に])が提示されるので「心象形容詞」を想起しやすい。

野菊の如き君なりき(伊藤左千夫の小説のタイトル)

涼しげな女とでも言えればいいのか、窓辺でゆれる夏の風鈴のような女。(吉田修一『東京湾景』p.13 新潮社 2003/10/15)

3) 「感覚喚起(類似)事象」+ 「心象形容詞」+ 「(限定化+) 名詞(集合イメージ・感覚情報)」+ 「(限定化+) 共起動詞」 心象形容詞(心象名詞) 感情

「感覚喚起(類似)事象」と「心象形容詞」の組み合わせに新鮮さを感じさせる可能性と、同時に心象の押しつけになる危険性を持っている。

しかしこの夫は、湯ざましのようになまぬるく妥協もすればだんまりも決め込む日本の夫たちとはわけがちがい、ユダヤ系英国人のインテリ文化に生まれて育ち、討論と論争にあけくれ、言葉の白刃の下をかいめぐり、わたしの二倍の年齢を生き抜いてきた夫であります。こちらの発するたどたどしい英語をいちいち箸でつまみあげるようにつまみ、熱いてんぷら油の中にじゅっと浸けこむような話し方をするのであります。

じゅっと揚げられ。

わたしは海老のようにちじこまる。(伊藤比呂美『とげ抜き新巢鴨地蔵縁起』pp.059-060, 講談社 2007/06/11)

明子が焼くと、街のパン屋で買う八枚切りの安

い食パンがホテルパンのように美味しくなるのだ。
(ねじめ正一『荒地の恋』p.73, 文藝春秋,
2007/09/30)

4) 「心象形容詞」+ 「(限定化+) 名詞(集合
イメージ・感覚情報)」+ 「(限定化+) 共起動
詞」 心象形容詞(心象名詞) 感情

発信者がイメージをまとめて、心象形容詞で情
報化して提示するので、受信者の感情が喚起され
ることが少ない。普通、名詞と共起する形容詞と
して収録されるのはこのタイプの表現である。

濡れたような抒情的な瞳が乳色の冷たい顔立ち
に似合い、どこことなくしっとりした鬨りが男心を
そそる。(朝日新聞夕刊 2008/3/29 「春に散った
愛人さくら」(団鬼六とさくら))

眩しい白壁の、広々とした店。奥のテーブル席
に、尾崎美郎が座っていた。明日、結婚する相手
だ。小柄なからだを仕立てのよいスーツに包んだ
その姿は、いかにも育ちがよさそうて、清潔感に
満ちていた。(桜庭一樹『私の男』p. 9 文藝春秋
2007/10/30)

また、外在化された現実感覚(common sense) 的
な心象形容詞を表層から隠して喩えて、幾たびも
使われる隠喩はここに属する：人生は旅である：
夜のとばり：言葉の白刃の下をかいくぐり。

4. 「心象」の収斂技巧

受信者は言語情報からまず「論理的納得」を得
るが、その論理的納得を支えるのは「感覚的・審
美的納得」で、それを受信者は「感性」でとらえ
る。「感性でとらえる」とは、言い換えると、
「名詞(・動詞)」を中心にした「心象の収斂で
とらえる」(小林秀雄風に言う「言葉の隠れた
下ごころ」ということである)。

たとえば、橋本治は『小林秀雄の恵み』(新潮
社 2007/12/20)の中で「十二世紀末の京都で開か
れた六百番歌合に於ける有名な藤原俊成の判詞」
に触れている。(pp.22-26)

「枯野」という題に対して左方の藤原良経は

「見し秋を何に残さん草の原 一つに変わる野辺
のけしきに」

と詠んだ。これに対して右方は「草の原が墓地を
連想させてよくない」とクレームを付けた。しか
し、判者俊成は、

「紫式部、歌詠みの程よりも物書く筆は殊勝也。
其上、花宴の巻は、殊に艶なる物也。源氏見ざる
歌詠み遺恨の事也」

と判じた。俊成は、良経が歌の中に「朧月夜のひ
たむきで可憐な恋慕の情を色気として宿そうとし
たこと」(同上)を感じとっていた。このとき、
俊成の頭の中には「草の原」という名詞を含む歌
が、少なくとも三つ

霜がれはそことも見えぬ草の原 たれに問はまし
秋のなごりを(皇太后太夫俊成女・新古今・冬
歌)

憂き身世にやがて消えなば尋ねても 草の原をば
問はじと思ふ(『源氏物語』花宴 617)

見し秋を何に残さん草の原 一つに変わる野辺の
けしきに(藤原良経)

が頭の中でつながったに違いない。

「心象の収斂性」が明らかになるとどうなるか。
たとえば、万葉集に額田王の有名な歌がある。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖
振る(額田王・万葉集・巻一・23)

これは「事象」「音」「色」が一つの「意思と
感性」によって「符牒」化されて、一つの「心
象」に収斂されている。

ところで、同じ作者が詠んだという歌が後の巻
にある。

君待つと我が恋ひ居れば我がやどの簾動かし秋の
風吹く(額田王・万葉集・巻四・489)

この歌は「符牒(事象)」を選択した感性が先
の歌と異なっていて、どうも駄作か偽作くさい。

普通は、このように疑わしい場合、「史実」
(記録があるとかないとか)が判断の重要な資料

となる。しかし、文学作品（言語情報）を「符牒（言葉）の有機的統合体」と見なした場合、「符牒（言葉）」の使い方（表現技巧上の巧拙）以外の資料に頼らないで、事象の選択や符牒の運用から、駄作あるいは偽作と判断したい。

また、松尾芭蕉の有名な句に

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

という句がある。これが単なる「叙景」ではなく「意思された叙景」であることは、山本健吉の『芭蕉』に示されている。簡単に言うと、この句は山寺を訪ねた時に作ったものではなく、5年以上も後に、しかも、次のような推敲を経てできたものである。

山寺や石にしみつく蝉の声

さびしさの岩にしみこむ蝉の声

さびしさや岩にしみこむ蝉の声

確かに「石にしみつく」は汚いし、「岩にしみこむ」は速すぎる。「岩にしみ入る」が美しい。しかし、発信者が「さびしさ」とか「閑かさ」とかの心象を吐露してしまうのは、受信者の感性を見下しているという点で二流である。むしろ「心象語」（心象形容詞・心象名詞）を排して

山寺や岩にしみ入る蝉の声

とでもした方が、発信者が受信者の感性を同等に置く真摯な意思を感じることができる。

言葉というものは、個々の経験からコアになる「集合イメージ」が形成され、それに様々な情報が付随して脳に蓄積されるはずである。したがって「名詞」を

「感覚刺激（類似）事象」

+ 「心象形容詞」+ 「（限定化+）名詞（集合イメージ・感覚情報・時・場）」+ 「（限定化+）（共起）動詞」+ 連想+ 関連国

で整理分類しておくとして、「感覚喚起（類似）事

象」や「心象形容詞」が名詞のどの部分と関わっているかわかりやすくなると思われる。たとえば、「さくら」に関して整理して（その一部を）示すと

感覚刺激（類似）事象 降るような、煙るような、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れわるを見る心地す」

心象形容詞（名詞） 美しい、艶やか、華やかな、狂おしい、麗姿、盛り

（限定化+）

名詞 さくら（桜）

・集合イメージ 春に咲く花

感覚情報

・形 五弁・八重

・色 淡いピンク、白、紅、紅葉

・音

・感触 暖かい

・味 甘い

・香り 桜葉（の香り）

・その他 吹雪、落花（しきり）

時 春（自然の始まり）

場 公園、堀、土手、里、（里）山、学校

（限定化+）（共起）動詞 咲く、咲き乱れる、（しずこころなく）散る、舞う、愛でる

連想 花見、合格、不合格、入学式、新入生、新学期、花魁、孤独、武士、死体

関連語句 桜守、桜男、桜前線、花冷え、禁忌の恋

などとなり、これを基にすると

さまざまの事おもひ出す桜かな（芭蕉）

の句では、「さくら」（名詞）の情報の中の「時」と関わっていて、元旦のような人為的な一年の始めと違って、自然の暦の春になると、桜が咲き、「今年の桜は・・・、去年は・・・」と言いながら、心の中で一年が過ぎて、また年が巡ってきたことを実感するというのである。

このような「感性」の基になるデータを、人間が脳に「名詞」を蓄積する時にしているように

「感覚情報」や「共起動詞」を含めてデータ化し、さらに深層に共通性を見いだせるようにしておけば、たとえば、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」（鑑賞辞典には「蛙とくれば鳴かせるものであるが、水に飛び込ませたのがいい」と書かれている）とか、正岡子規の「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」（鑑賞辞典には「柿好きの子規がてらいなく歌っているところがいい」と書かれている）とか、調べても明快な解説が書かれていない句・歌・詩などに関して、符牒の運用、言い換えと「表現技巧(creative writing techniques)の観点から、もう少し納得のいく合理的な説明を提示することができるようになるのではないかと考えている。それは同時に、符牒の関係性を明らかにすることにもなるので、新しい表現を創り出すヒントになるのではないかと考えている。たとえば、「さくら」には「花吹雪」のように「雪」のイメージがあるので、雪についての描写（川上弘美『風花』p. 18 集英社 2008/4/10）を「花びらは、まるで空気よりも軽いものであるかのように、なかなか地面には落ちずに中空をただよっている」のように利用することができるのではないかと考えている。

参考文献

- [橋本治(2007)] 『小林秀雄の恵み』（新潮社 2007/12/20）
- [穂村 弘(2007)] 『短歌の友人』（2007/12/30 河出書房新社）
- [井上宗雄・武川忠一(2001)] 『新編和歌の解釈と鑑賞事典』（東京、笠間書院）
- [岩垣守彦(2002)] 人工知能学会「「物語」のための「事象」の配列法則について」
- [岩垣守彦(2004)] 物語から文学へ変容のための文学的技巧について、第18回人工知能学会全国大会、ことば工学ワークショップ、石川厚生年金会館、金沢。
- [岩垣守彦(2006)] 「言葉」で新しいイメージを作ることとはできるか、ことば工学、神奈川大(2006/08/05)。
- [岩垣守彦(2006)] 言葉とイメージと映像と想像力の問題、日本認知科学会ワークショップ、中京大

(06/08/04)。

[岩垣守彦(2006)] 「物語」について、電通物語研究会、電通本社(06/11/09)

[岩垣守彦(2007)] 発信される「表現」と受信について、ことば工学、東京外大(070316)。

[岩垣守彦(2007)] 感覚刺激の観点から感情喚起の方法を探る（第13回LCC 例会（近畿大）

[岩垣守彦(2007)] 深層に沈んでいる感情を表層で波立たせる --- intertextuality の原点的考察（071214 ことば工学、阪大）

[岩垣守彦(2008)] 080328 「読む」とは「創る」こと --- 「表現技巧」について（ことば工学（神奈川大 2008/3/28）

[尾形 功(2000)] 『新編俳句の解釈と鑑賞事典』（東京、笠間書院）

[小海永二(1979)] 『現代詩の解釈と鑑賞』（東京、旺文社）

[Riffaterre, Michael(1978)] Semiotics of Poetry. Indiana University Press（斉藤兆史訳(2000) 『詩の記号論』東京、勁草書房

[吉田精一・分銅惇昨(1969)] 『近代詩鑑賞辞典』（東京、東京堂出版）